

序

犬塚孝明

『国際人間学部紀要』の本号を、荒井聰子教授の御退職記念として刊行し、本学における14年にわたる多大な御尽力と御労苦に深謝しつつ先生に献げたい。

荒井先生は昭和58年にオックスフォード大学大学院において学術博士の学位をお取りになり、イギリス留学から御帰国後は引き続き鹿児島純心女子短期大学に奉職されていたが、平成6年4月、薩摩川内市に本学が創設されるにあたって、国際言語文化学部助教授として赴任され、以来イギリス文学・文化および比較文学比較文化関係の講義、演習を担当されてこられた。先生はオックスフォード大学へ提出された学位論文以来のテーマである、中野重治、ジョージ・オーウェル、アーサー・ケストラーという3人の同時代作家たちが、日本、イギリス、東ヨーロッパの三つの文化圏においてどのように生き、その作家的資質を形成していったのかを比較検討、国際的な視野から文学、思想まで幅広く御研究、数多くの論文を発表してこられた。長年の留学生活で培われたイギリス文化に対する愛着とその御造詣の深さには敬服の念を禁じ得ない。

また、平成7年5月から学長の重責を担ってこられた先生は、草創期における数多の困難を乗り越えて、大学の発展に名実ともに献身的な努力をされてこられた。シスターとして修道会の重要なお仕事をこなしつつ、学園全体の発展に周到な目配りをされていた先生の真摯な御姿勢は忘れることができない。学長の職を退かれてからは、再び国際人間学科長として直接学生の指導にあたられ、学科内の充実とその組織化に大いに力を尽くされた。

研究者、教育者として時には厳しく時には優しくわれわれ同僚や学生に接してこられた先生の温厚篤実なお人柄に勇気づけられることも多かった。シェイクスピア・ガーデンで一生懸命に土を耕し、草花に水をやり大切に育てておられた先生の優しいお姿も忘れられない。大学や学生に対する先生のこれまでの御労苦を無にすることなく、われわれも大学、学部の発展に力を尽くさねばならない。先生がこれからもますます御壮建に、御活躍あらんことを祈念して、献呈の辞としたい。

平成20年1月